

### 夏の年越し、チリ雑煮、大厄Trío

チリに来て初めての年末・年越しを経験しました。チリではクリスマスは家族と静かに過ごす習慣ですが、一方年越しはとても賑やかです。私の住んでいる住宅街でも、年越し直前には街中から歓声が聞こえ始め、カウントダウンが始まりました。新年を迎えた瞬間は、歓声と共にあちらこちらから花火が打ち上げられました。クリスマスの時期が比較的賑やかで、静かな新年を迎える傾向のある日本とは対称的です(もちろん日本でも新年を賑やかに迎える向きもありますが)。元旦には雑煮にチャレンジしました。我が家では例年、父方の故郷である博多の鰤雑煮を作ります。チリでは鰤が手に入らなかったので、中央市場で見つけた鰹(bonito)と、日本から持参したあごだしを使って"博多風チリ雑煮"を味わいました。

ところで私は、今年大厄を迎えます。赴任前、前厄の年に厄払いをしてきたものの、はたしてチリではどの様な運命が待っているのか想像もつきません。実は現在のLACRCスタッフのうち3名は大厄の最中にあります(私以外は後厄ですが)。様々な苦難が訪れること必至ではありますが、一致団結して苦難を打ち砕きたいと誓い合っている次第です。

ニュースレター第7号では、進行中の大腸癌早期診断プロジェクト(PRENEC)の報告を中心に、LACRCの活動をお伝えしてまいります。また前号に引き続き医学科4年次プロジェクトセメスター学生によるチリ滞在記もお届けいたします。

河内 洋 LACRC 人体病理学分野



本年もよろしくお願いします。(大厄Trío:小林助教、田中助教、河内講師)









#### **Contents**

ご挨拶	I
PRENEC最新情報	2
TMDUと私	4
活動報告	5
プロジェクターセメスター	-

# PRENEC最新情報

本年5月に開始されたラテンアメリカ共同研究拠点 (Latin America Collaborative Research Center,以下LACRC) のメインミッションである PRENECの最新情報をお伝えいたします。PRENECでは、第5州のバルパライソ、第12州のプンタ・アレナスにおいて、それぞれ年間3,000 人、サンティアゴにて5年間で2万人を対象にiFOBT(免疫学的便潜血反応検査)を実施することになっています。12月末時点では全拠点 で、約2.500名が登録、約2.300名がiFOBTを終了しています。今回は、PRENECに関連して「チリにおける大腸癌の環境的および遺伝学的 危険因子」について研究を行っているLACRCスタッフ・小林助教のプロジェクトをご紹介いたします。

### PRENEC検体を用いた研究のスタート

12月よりPRENECの検体を用いた研究がスタートしました。研究環 境の構築、物品の購入、納品に要する日数等、様々な事象における 日本との相違に七転八倒しながらも、ようやく研究の始動に至りま した。

プンタ・アレナスのマガジャネス病院をモデル拠点として、末梢血 サンプルおよび大腸組織検体の採取に関するプロトコールの整備、 保存・輸送方法の徹底によりPRENEC検体の収集が進行しておりま す。プンタ・アレナスでは予定の3000名のうち現在までに2080名を 対象として便潜血反応検査を施行しております。本研究では図に示 す通り、そのうち大腸内視鏡を施行する対象者より末梢血サンプル、 検査の結果腫瘍を認めた患者より病理組織標本(診断に用いたホ ルマリン固定パラフィン包埋ブロック)、大腸癌と診断され内視鏡的 切除あるいは手術を施行した患者より、可能であれば新鮮凍結組

織を採取する予定でおります。

またバルパライソのエドアルド・ペレイラ病院では、既に約450名 を対象として便潜血反応検査が施行されております。その便潜血 反応陽性率、腫瘍陽性率、癌陽性率はほぼプンタ・アレナスと同様 に推移しており、この割合から今後行われる各拠点を合計した 20000人の対象者から得られる各検体数を類推すると、末梢血サ ンプル約2000例、病理組織標本約1000例、大腸癌症例約100例に 及ぶものと思われます。

本研究を遂行するとともに、今後の継続的研究を視野に入れこ れらの検体のBioBankの構築も現地研究者と協力し進めておりま す。以上、研究の進捗状況は随時このNewsletterで紹介していく予 定です。



便潜血反応検査の担当者らと研究所にて

### **PRENEC Samples**

PRENEC対象者

便潜血反応テスト(iFOBT)施行 約10%

iFOBT陽性例

癌

内視鏡検査前

血液検体 遺伝子解析

約10%

大腸内視鏡検査施行 約50%

E検、病理診断後 腫瘍(良性及び悪性)

ホルマリン固定パラフィン包埋切片 免疫染色

遺伝子解析

大腸内視鏡的切除、大腸切除術 治療後

凍結切片 免疫染色 遺伝子解析

### メディア掲載

サンチアゴにおけるPRENECは、サン・ボルハ病院の日智消化器病研究所にて展開されることになっています。田中浩司助教は、LACRC 着任当時より、週3日ほどサン・ボルハ病院で、通常の大腸内視鏡検査に携わったり、現地医師への指導を行ったりしています。その様子が、チリの大手メディアであるEl mercurio紙によって取材され、先日、特集記事が掲載されましたので、ご紹介いたします。

チリ生活は11ヶ月、スペイン語のレベルはそこそこ。チリ医療機関に勤務する唯一の日本医師は、辞書とジェスチャーで患者 とコミュニケーションを図る。サン・ボルハ病院では、この日本人医師と笑顔溢れる日々を楽しんでいるようだ。

日本人医師である田中浩司医師(41歳)は、サン・ボルハ病院に 長年勤務していたかのように廊下を歩いていく。すれ違った患者に は笑顔を向け、検査室では大腸内視鏡検査を行う。

誰もが、彼と言葉を交わすまでは、チリに長年住んでいると思ってしまう。実際のところ、彼は殆どスペイン語を話せないのだけれども。

田中医師はチリの医療機関に勤務する唯一の日本人だ。毎週火曜、水曜、木曜にサン・ボルハ病院にカバンを抱えて、笑顔でやってくる。内視鏡医としての16年間の経験を買われ、チリ保健省、CLC、東京医科歯科大学が行うPRENECの重要な役割を担うために、田中医師は日本から赴任してきた。

彼の長期目標は、乳がん予防検診のようにPRENECが全国に普及し、チリのAUGE(特定の病気の予防プロモーションを支援する)に登録されることだ。また患者とのコミュニケーションをよりよくしていくこという目下の目標もある。

病院のスタッフは、ゆっくり話したり、ジェスチャー・絵などで田中 医師とコミュニケーションをとる。「Cooomo estaaa? (調子はどう?)」 とあるスタッフが声をかけると、笑顔で、けれども少し恥ずかしそう に「bien(上々だよ)」と返事をする。スペイン語で話かけられても、内 容はなんとなく聞き取れる。ただ、返事をするのは難しい。取材中 も、重要な会議に出席する際と同様に、通訳が同席していた。

患者とのコミュニケーションは、そうはいかない。診察には、辞書を持ち歩く。「こちらを向いてください。」「息を深く吸って。」などのように、辞書には診察中に必須のフレーズや言葉が書き留められている

同僚の内視鏡医とは、英語やスペイン語を交えながら、日常会話を行っている。サン・ボルハ病院の日智消化器病研究所の所長であるリカルド・エステラ医師は、「不思議なことなのだが、田中医師は皆の言うことは理解しているし、私たちは彼から色々なことを学んでいる。」と語る。

田中医師は、チリの医療施設について、「日本の病院のように、新しい機器が揃っている病院もあり、驚くような古い機械が使われている病院もあります」というが、古い設備であっても、彼の仕事は滞ることはない。「癌は早期に発見すれば治療できるものだ」という。青年時代のある体験から彼が学んだことだ。

田中医師が、まだ医学生だった頃、祖母が乳癌の診断を受けた。 悪化する癌を前に、自分の非力さを感じた。この経験が、癌と対峙 するエネルギー生み出すきっかけとなった。数年後、今度は従兄弟



の大腸に癌が見つかるが、医師として対峙することができた。「従 兄弟は33歳のときに癌になりましたが、46歳の今になっても、元気 に生活していますよ。」

このような体験があるからこそ、PRENECへの参加を決めた。出身校である東京医科歯科大学から、チリ行きのオファーを受けても迷いはなかった。

ただ、当初は、様々なことで戸惑った。例えば、時間だ。「日本では、約束をすると、約束の時間前に待ち合わせ場所に来るが、チリでは、約束時間を過ぎてから、やってくるのです」。

チリに来る前に知っていたことは、気候やフルーツ、ワイン、サーモン、星だったという。「Almaプロジェクトは日本政府が支援しているプロジェクトなので知っていました。観測所の写真や天体写真をみたことがあります」。趣味は旅行だ。現在までに、バルパライソやビーニャ、イースター島、アタカマなどを訪れている。今後は、パタゴニアにも足を伸ばす予定だ。

日本の真裏まで一緒に来てくれた妻や子供たちとともに、田中医師は来年の5月に帰国する。それまでに、少しでもスペイン語を上達させたいという。

田中医師にとって、チリはとてもエキゾティックな国だそうだ。サン・ボルハ病院では、彼が最もエキゾティックな存在ではあるのだけれども。 (記事: Nadia Cabello、翻訳:四宮)

## 寄稿:TMDUと私

1968年に本学第一外科の村上忠重教授(当時)がチリを始めて訪問したことをきっかけに、東京医科歯科大学とチリの40年以上に渡る交流が始まりました。本号では、本学に留学され、現在カトリカ大学医学部消化器科准教授に就任されているアドルフォ・パラ医師にご寄稿いただきました。

#### アドルフォ・パラ医師 カトリカ大学医学部消化器科准教授

TMDUへの想いをこの限られたスペースでどのように語ることができるでしょうか。1995年から1999年の4年間、私は日本に滞在し、昭和大学藤が丘病院で内視鏡検査の研修を受けました。その頃、東京医科歯科大学の第一病理学教室にて研修中であったグアテマラ人の仲間より、世界的に有名な中村恭一教授(当時)の紹介を受けました。中村教授と教室のメンバーは、出会った当初から、手厚くサポートしてくれ、とても友好的でした。また、彼らはとてもオープンで国際的でした。実際に中村教授やメンバーとのコミュニケーションはスペイン語で行っていたほどです。

TMDUでの消化器腫瘍の内視鏡診断と治療に関する病理診断学の研修中には、沢山の外国人医師(多くはラテンアメリカ出身の医師)に出会うチャンスがありました。特に南米からTMDUに研修に来ていた内視鏡医と知り合うことができました。数多くの外国人医師がTMDUを訪問していることは大変興味深いことでした。

日本での私の経験が、私の人生を変えたといっても過言ではありません。後に妻となるTMDU歯学部に留学していた日系ブラジル人の女性と知り合うこともできました。数々の研修、様々な支援、友情を与えてくれたTMDUには、感謝の言葉しかありません。TMDUに留学できたことは私の誇りです。

日本での研修を終え、スペインに帰国した後は、内視鏡医として13年間勤務しました。現在は、チリ・カトリカ大学の消化器科に赴任して、1年を経たところですが、日本から帰国後もTMDUとの交流は続いています。スペイン時代には、江石教授(人体病理学分野)に研究のサポートをしていただきました。また、TMDUで知り合い、今でも良い友人の1人であるウルグアイの内視鏡医であるエドアルド・フェノッキ医師が自国で行った大腸癌早期診断プログラムにも協力することができました。フェノッキ医師とは、現在チリでの協力体制を模索中です。

チリ人のジョレンス医師によって設立された日智消化器病研究所、 JICA主催の日本での内視鏡・病理分野の研修コースなど、TMDUが 早期消化器腫瘍分野における最新知識の普及を長年に渡って行っ てきた南米に、偶然にも現在私は住んでいるのです。

南米の数百万人の患者と数百人の医者だけではなく、世界中において、TMDUの国際医療社会への貢献の成果が広まることを確信しています。

略歷:

アウトノマ・デ・マドリッド大学医学部を卒業後、1990年より、スペインで消化器医として勤務後、1995年より、昭和大学藤が丘病院で内視鏡医としての研修を受ける。その後、国立がん研究センター東病院でもフェローシップを行う。1999年にスペインに帰国後、内視鏡医として11年間にわたり勤務。現在は、チリ・カトリカ大学消化器科准教授。



江石教授、大山学長とチリで再会



来智していたフェノッキ医師(右)とLACRCスタッフと記念撮影

(翻訳:四宮)

# 活動報告

## TMDU訪問団によるチリ視察

2013年1月20日から26日まで、本学人体病理学分野の江石義信教授と関根正喜技官が訪智し、JICA・JSPSにおいて採択されている分子生物学分野の科学技術協力の一環として、病理組織標本作成の指導を行いました。また、JICAチリ支所、在チリ日本大使館等の訪問や、3月より新たにPRENECを開始するラ・セレナのカトリカ・ノルテ大学及びサンパブロ・コキンボ病院を訪問しました。その他、現在プロジェクトセメスターの課程で研究実習を行っている本学医学部4年生の研究発表会も企画され、江石教授、各担当教官、学生たちの間で活発な討論が行われました。



JICAチリ支所訪問



研究発表会の様子



研究室を視察する関根技官



ラ・セレナで現地メディアの取材をうけるCLCのロペス医師と江石教授

## プロジェクトセメスター学生チリ滞在記

本学は、2010年10月より、プロジェクトセメスターの課程にある医学科4年生を5カ月間にわたってチリの研究機関へ派遣しており、LACRCでは、彼らの研究・生活のサポートも行っています。今年度も、10月11日に6名の学生がチリに到着いたしました。このうち3名がCLC、3名がチリ大学の研究室に所属しています。本号でも、前号に引き続き、学生のチリ滞在記をお届けいたします。

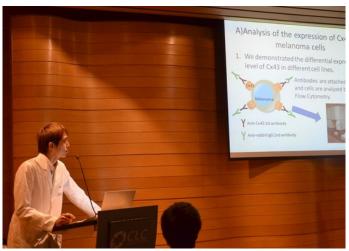
### 遠い異国の地で

### 猪田浩隆 チリ大学医学部腫瘍免疫学研究室所属

ここサンティアゴでの生活もかれこれ2ヶ月、仕事と生活のバランスもようやく取れてきました。私は海外に訪れた際、いつも訪れた国のバックグラウンドを調べるようにしています。そうすると、自分の何気なく見る風景がにわかに意味を帯びて浮かび上がってきます。

ここでは、旧市街と新市街があり、それぞれ大方、西と東に位置 します。また、両者には格差があり、前者は治安が悪く貧乏で、後 者は安全で裕福であります。欧州系の顔立ちが殆どで、彼らの多く は、欧州からの移民と先住民族の両方の末裔なのです。新市街で は白人に近い人が多く、旧市街には原住民に近い人が多くいま す。旧市街にはチリの伝統的な小さいレストランが並び、とても安 い値段で食べられます。新市街では、豪華なマンション群がそびえ 立ち、アメリカのような巨大モールでは日本の物価と殆ど同じです。 私は以前その一つでレストランに入り、「NIKKEI」というメニューを 頼んでみました。中身は照り焼きチキンでした。名前がTERIYAKIで はないことから、この料理は直接ではなく日系移民によって広まっ たのでしょう、祖国を懐かしんだ移民の気持ちに思いを馳せながら いただきました。そして、最近隣国アルゼンチンを訪れる機会があ りました。首都ブエノスアイレスは、南米のパリと呼ばれるほどの欧 州化された都市で、街の中心部では教会、官庁、銀行など多くの建 物が欧米のそれに匹敵する見事なものでした。しかし、この街には 影の面があります。この国は穀物の輸出により豊かな国になりまし たが、21世紀前後の財政破綻と経済危機により、昔からの金持ち の多くは崩壊した祖国を背に欧州などへ逃げるようにして去って行 きました。彼らの跡には大量の貧困層が残されていきました。犯罪 の増加、ストライキやデモの頻発、中心部を走る地下鉄も荒廃し、 影はいたるところに色濃く残っています。実は、この綺麗な町並み、 20世紀の始めに国が豊かになり欧州から大量の富裕層が移り住 み、パリを忠実に再現しようとした壮大な実験の遺産でした。骨董 屋や古本屋では100年前の品が当時を思わせるように並んでいま した。

南米の街は、様々な思惑で世界の各地から移り住んできた人たちの足あとが色濃く残っているところだと思います。彼らはそれぞれ何かに挑戦してこの地に立ち、一生懸命新しい国を建設しました



研究発表会でのプレゼンテーションの様子



高速道路が貫く家の近所の新市街の町並み。

が、その傍らで後にしてきた国をどうしても忘れることができなかったからなのでしょうか。私の曽祖父は、滋賀県の片田舎から高校卒業後、自分で会社を設立し、若干二十代で戦前の上海租界に家族で移住することを決断しました。中国大陸で事業を起こすためです。彼は日本語しか話せませんでしたが、狭い部屋の事務所から始めて、一つずつ実績を積み重ね、大きな会社に成長させたとのことです。彼がどのような苦労をしてきたのか想像するのはやはり難しいことです。チリへ私が来たときは、彼のように一人で新天地に来たわけではなく、大学の事務所があり、そのスタッフの方々の助けけを借りて生活し始めました。地理的に遠く英語すらまともに通じ

ないこの地で、拠点をひとつ開くにも、とてもとても大きなエネルギーが必要だったことと思われます。そのようなことを考えていると、曽祖父の話や南米の街を見ているときと同じような気持ちが湧いてきました、しかしながら、それはさらにもっと目の前にあるような気がします。学生だと安全面から既知の航路だけを辿らせてくれるのが普通だと思うのですが、先頭の船が海図に載っていない海を進んでいて、その直後でぴったり付いている船に私達は乗っているみたいです。今現在、日々医療のために新天地で挑戦する方々の姿を脇で見られるということに、昔の人々がなしてきた様子をリアルタイムで見ているような感覚を覚えるのです。

## チリにて --研究とスペイン語--

#### 瀬賀雅康 CLC腫瘍学·分子遺伝学研究室所属

チリに来て早三ヶ月が経とうとしています。月日が過ぎるのはあっという間なもので残りの期間を大切に過ごしたいものです。さて、チリでの生活について紹介したいと思いますが、大きく分けて研究生活と日常生活に分けて紹介します。

研究についてですが、まず私の所属しているCLCの研究室では基本的に週に一回の小さなミーティングを設けて下さっており、その一週間の進捗状況の報告や論文の抄読会、発表の直前にはそのリハーサルなどに充てられています。チリ人の研究室員同士はスペイン語で会話しているのですが、私のスペイン語のレベルが日常会話程度未満なためにあいさつ程度を除けば、研究内容などについては英語で会話をしています。先月のNews Letterの後に二度目の進捗ミーティングがありそれに合わせて研究、及び発表の準備を行ってきました。現在は第三回目の発表会を目標に実験を着々と進めているところです。自分の実験内容をプレゼンテーションするのはその作り方を含めて大変勉強になります。

私の研究は大腸癌についてであるため、大腸癌のサンプルがどのようにして採集されているのかを知るために、実際に手術を見学させてもらえる機会があり、またサンボルハ病院の病理部へ河内先生と小林先生がいらっしゃるときにご一緒させてもらったり、チリ大で行われた免疫学の講演会を聞きに行ったり、実験室以外の場を目にする機会にも恵まれました。現在は残りの期間が僅かとなってきたため、発表に間に合うようにサンプルの分析を行うことに専念しています。

さて、日常生活についてですが、私はこれまでスペイン語をしっかり勉強をしたことがなかったので、来た当初はほとんど分からない状態でした。三か月経ってみると、よく使うような表現については、覚えて使うことができるようになり、話を聞いて詳細には解らないものの聞こえる情報の断片から内容を推測できる程度にはなりました。語彙数も少なく、流暢な会話はまだまだ難しいですが、話が通じたときの喜びは、来た頃に話が全くできずもどかしい思いをしてきたことを思い出すと大きな前進に思えます。



見事な彫刻が施されたおびただしい数の石の墓。ブエノスアイレスにて(猪田)



チリ大学の研究室に向かう途中にある旧市街の風景(猪田)



CLCの研究室の皆さんとの記念撮影(瀬賀)

今回来た学生の中で私だけが滞在する上でホームステイという 形態を取っているため、これについても少し言及します。ホームス テイの一人暮らしとの最大の違いは、ホストファミリーとの会話が存 在することにあると私は考えています。会話はスペイン語でなされ るため、毎日のように交わされる挨拶や食事などについての基本 的な言葉は来て比較的早期のうちに理解することができるようにな りました。また、日本について質問をしてくれたときなど、なかなか 説明が難しいことも多々ありスペイン語習得のためのやる気に対し て良い刺激にもなりますし、日本についての理解を深めなければな らないと改めて思わされました。先日は日本食を振舞ったところ非 常に好評で、文化交流という面でもより近いところで接することがで きるとも考えられます。なお、チリのスーパーマーケットは非常に食 材が豊富であり、特に米が手に入るのは非常にありがたいです。

チリでの生活では日本とは違う物事が多くあるため普段の生活が 非常に刺激的であり、少しずつ慣れては来ているもののこの新鮮 な感覚を以てチリについて、また逆に日本について新たな発見が できたら良いだろうと考えています。残り少なくなってきた滞在期間 ですが、研究についてもそれ以外でも何かしらの発見を試みながら 過ごしたいと思います。



LACRCスタッフとの新年会の様子



手術室にてエンシナ研究員と



ホストファミリーに日本食を振る舞う

### 編集後記

LACRCオフィスは、CLCの大腸肛門科と併設しており3名の 医師と4名の看護婦や秘書が所属しています。クリスマスには 全員でプレゼント交換会をするなど常に笑いの耐えない明る いオフィスでLACRCスタッフも大腸肛門科の皆さんとの交流を 楽しんでいます。今後もLACRCオフィスの近況をご報告してま いりますので、引き続き、ご愛読の程宜しくお願いいたします。 (四宮里枝子) 東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点 Latin American Collaborative Research Center Newsletter No. 7, January 2013

[発行日] 2013年1月31日

[制作] Latin American Collaborative Research Center Tokyo Medical & Dental University Clínica Las Condes Lo Fontecilla 441, Las Condes, Santiago, Chile Tel: (56-2) 610 3780 Fax: (56-2) 610 8610 Email: rshinomiya@clc.cl